

## 樋口一葉『琴の音』の構想とその基盤

### THE CONCEPTUAL WORLD AND ITS BASIS OF HIGUCHI ICHIYO'S *KOTO NO NE*

林 嵐\*

Higuchi Ichiyo's short story *Koto no ne* ("The Sound of the Koto") was completed in 1893 in response to a commission from the literary magazine *Bungakkai*. The story consists of two separate sections: the life of an delinquent youth and the tale of a young thief who is reformed after overhearing the sound of a koto. The first of Higuchi's works to be written during her time as a peddler in Ryusenji-cho, the story testifies to her perceptive social observation while revealing a marked change in her prose style. Scholars have previously emphasized two points: the influence on Higuchi of Hirata Tokuboku's theory of art for art's sake, and Higuchi's own experiences in Ryusenji-cho.

In my paper I would like to build on these theories with the following points :

(1) According to her diary, Hirata visited Higuchi's house and told her that "the Japanese literary world derives its strength from the achievements of

---

\*LIN Lan 中国東北師範大学卒業。現在同大学講師。信州大学修士課程を経て、新潟大学博士課程在学。主な論文は「平塚雷鳥」「樋口一葉与『十三夜』里的阿閩」「樋口一葉『にごりえ』と小宮山庄司」「芥川龍之介『地獄変』と変文変相」「継母譚に見える孝行思想－『落窪物語』と『西陽雜俎』を中心に－」。

women writers.” Inspired by this, Higuchi decided to use as material for her story the theme of musical reformation from Section 429 of *Kokin Chomonju*, “The tale of a thief whose heart was changed upon hearing the music of a *hichiriki* [a kind of Japanese flute].”

(2) Komiyama Shoji, the husband of Higuchi’s cousin Hirose Bun was deserted by his wife after their decline into poverty and was subsequently suspected of robbery. Higuchi made efforts to help him and took pity on Kaichiro, his 13-year-old son. These events may have provided material for “The Sound of the Koto.”

(3) Higuchi had read articles entitled “To Write” (published in *Bungakkai*, 1893) and “Literature and Livelihood” (*Waseda Bungaku*, 1892). She may well have been influenced by these and other essays in regard to her change from a popular writing style to the more realistic style seen in “The Sound of the Koto.”

—

樋口一葉は明治26年7月本郷菊坂から下谷龍泉寺町に移り、生計のため、翌年5月までそこで荒物駄菓子屋を営んだ。この下町での十ヵ月の生活は、一葉一家を貧窮から救い出すことはできなかったけれども、『大つごもり』（『文学界』明治27・12）、『たけくらべ』（『文学界』明治28・1-29・1断続掲載）、『にごりえ』（『文芸倶楽部』明治28・9）など一連の名作を生み出す支盤を作ったことは疑いない。短篇小説『琴の音』（『文学界』明治26・12）には、こういう一葉の下町生活期間の第一作として、その社会観察眼の熟成と作風転換試行の様子とが認められる。作品における写実的描写と古典文学の受容との二部構造が、一度筆を擱いた一葉の文芸活動の新たな端緒を示し、作品に現れた浪漫主義芸術の精神が、『文学界』の青年からの刺激によって新しい文学への関心を物語っているように思われる。

『琴の音』は「上」「下」の二つの部分に分けられている。「上」は浮浪児金

吾の身の上話を描き、「誠の盗賊」になったことを叙してしめくられる。「下」は独り栖みの女性おしづのことを叙し、盗賊となった金吾が、そのおしづの弾く「澄のぼる琴のね」に「うれしといふ事も覚えぬ、恥かしさも知りぬ」と新たな自己に目覚め、冴える月光、菊の香の中で「これより百花爛漫の世にいでぬ」と劇的な叙述を以て終わっている。結局この小説は、貧乏な少年が盗賊になるまでの話とその盗賊が音楽の感化によって改心した話との二つで組み立てられ、琴に専念するおしづの存在及び彼女についての描写が、この写実風と説話風の二話の一つに束ねているものである。

こうした『琴の音』は、確かに「小品以上のものでない」（湯地孝『樋口一葉論』至文堂、大正15）かも知れない。しかし、その一方、作家一葉の成長過程の一環として、従来の研究はこの小説の創作に注目し、さまざまな説を提出している。例えば「上」における少年の話について、岡保生は、「おそらく上の、汚らしい乞食小僧の描写は、一葉が龍泉寺町に転居してから見聞した事実がもとになっているだろう」<sup>①</sup>と、その写実性の一面を説き、松坂俊夫は

森しづも、「暁月夜」の香山一重の後身といえよう。一重の母も「琴のほまれ高く」、一重も琴を愛しており、彼女が身を寄せる鎌倉別邸には「名物の松」があり、「琴の音」のしづの家にも「軒ばに高き一もと松」がそびえている<sup>②</sup>

と、おしづを従来の小説の延長線上に位置づけている。この松の設定をめぐることは、早くから和田芳恵の

このあたりの一葉の生活は困難をきわめていたから、旧い草稿の「ひとつ松」を生かしたのだろう<sup>③</sup>

という旧草稿使用説がある。

さらに「下」の部分の成立を解明しようと、笹淵友一は、「ペイターの審美主義に基づく芸術至上主義思想と「琴の音」の音楽三昧境との情調の共通性から推せば、禿木の思想が一葉に何らかの示唆を与へなかったとは言へない」<sup>④</sup>と述べ、着想の根本を西欧文芸の間接的受容に求め、ペイターに傾倒する平田

禿木からの影響説によって後の研究者の目を引いている。そのほか、鷗外訳の『即興詩人』や近松門左衛門の『丹波與作』との関わりを論ずるものもあり、

源氏の一節を思はせるやうな古典的な句があるが、実感が稀薄である<sup>⑤</sup>  
とか、『源氏物語』の須磨にある五節の君の歌

「琴の音にひきとめらるる綱手縄たゆたふ心君しるらめや」による<sup>⑥</sup>  
というような古典文芸との繋がりに言及した論もある。しかし、写実性が高いと言われた少年のモデルや、音楽の力で盗人が改心した話の由来については、従来の研究では、まだ具体的に指摘されていない。それで上記の諸説を踏まえて、『琴の音』の構想とその基盤を明らかにしてみたい。

## 二

一葉の「塵中日記」明治26年9月24日の記述のあとに『古今著聞集』からの書き抜きが見える。これについては筑摩書房1976年版『樋口一葉全集』第三卷(上)の補注には、

『古今著聞集』の覚書が鉛筆で書かれているのは東京図書館で閲覧したためである。東京図書館ではインキ・墨汁の使用が禁じられていた。  
とある。また同じ内容の書き抜きは「塵中日記 今是集(乙種)」明治26年10月16日の条にも見える。一葉が図書館で『古今著聞集』を読んだことは確かである。9月18日、星野天知からの寄稿催促の端書を受け取った一葉は、

四五日頭痛はげしく加ふるに商業忙しく何事をもものせず  
という状態を経て、9月24日図書館で『古今著聞集』を繙いたのは、明らかに創作のための種探しであったと考えられよう。この天知の依頼に応じて書いた小説は『琴の音』であるので、『古今著聞集』と『琴の音』とを直接結びつけることができる。当時博文館からすでに日本文学全書24冊が出版され、その第二十一編の一冊(明治24)が『古今著聞集』であった。活字で印刷された460頁のこの書は読みやすく、一葉の読書速度から推定すれば連日図書館通いの中でたやすく通読したのであろう。

建長6年(1254)成立の『古今著聞集』は、作者橘成季が序文に「頗雖爲狂簡、聊又兼実録」と書いたように、一種の聞き書きで、王朝貴族の優雅な文化活動を伝えた説話が多い。そのうちには「神祇」、「釈教」、「文学」、「和歌」の各巻と並び音楽説話を集めた巻第六「管弦歌舞第七」のような一巻も収められ、巻第十二「偷盜第十九」に盗人・海賊が音楽の感化で改心した話が二つ入っており、「盗人博雅三位の筆箏を聴きて改心の事」<sup>⑦</sup>はその一つである。

博雅三位の家に、盗人入りたりけり。三品板敷の下に逃げかくれにけり。盗人かへり、さて後はひ出で、家中を見るに、残りたるものなく、皆取りてけり。筆箏一を置物厨子に残したりけるを、三位とりて吹かれたりけるを、出でさりぬる盗人、遙にこれを聞きて、感情おさへがたくして、歸り来ていふやう、只今筆箏のねを承るに、あはれにたふとく候ひて、悪心皆あらたまりぬ。取るところの物ども悉くに返し奉るべしといひて、皆置きて出でにけり。昔の盗人は又かくいうなる心もありけり。(博文館明治24年版による)

話の筋は簡単であるが、ポイントは音楽の力にある。一葉はこの説話から示唆を得たのではなかったか。

楽器の演奏効果から言えば、筆箏の音は悠長・哀婉で聞き手に訴え、その惻隱の心を動かすぐらいの力を持っていたのであろう。しかし、上記の説話の主題は、楽器の力そのものよりも「諸道に長ぬるはかくのごとくの徳をかならずあらはす事也」(「筆箏師用光臨調子を吹き海賊感涙の事」、傍点引用者)という管弦の道への精進を勧め、音楽の徳を讃えるものである。その点『琴の音』「下」には、

軒ばに高き一もと松、誰れに操の獨栖ぞと問はゞ、斯道にと答へんつま  
琴の優しき音色に一身を投げ入れて、思ひをひそめしは幾とせか(傍点引用者)

とおしづについての描叙があり、上の説話に通じるものであると思われる。星野天知が原稿依頼の書簡に「斯道の爲めやりそこねても何の罪にも成るべから

ず」(明治26年9月16日附<sup>⑧</sup>、傍点引用者)と、『雪の日』(『文学界』明治26・3)以来筆を休めていた一葉に勧めていることばは、一葉の心に響いたように見える。作中人物の「斯道」への精進を促していることが、作家一葉の文学への専念の決意を暗示していると解されよう。

『古今著聞集』における「諸道」とは、文学・和歌・管弦の道である。ここでの文学とは漢文のことであるが、藤原公任の名高い逸話“三舟の才”に見られるように、漢文・和歌・管弦の三つが王朝貴族の文化的素養として尊重されていたことは、一葉も早くから知っていた。音楽とも無縁ではなかった一葉は、歌塾萩の舎の同門弟子の催しで琴の演奏を聞いたことがしばしばあり、

○久子の君が<sup>弾</sup>引すさ<sup>び</sup>給ひしことのねは心なきおのれさへ松風のひ<sup>び</sup>きともやいふへからんとおもはれ侍りき(「若葉かけ」明治24・4・11、傍点引用者)

○水野せん子君の琴聲心なき身にもそ<sup>ぞ</sup>ろにミみかたふかれぬ 始めは小<sup>が</sup>かう次は松竹梅(中略)いとおもしろかりし(「日記」明治25・4・5、傍点引用者)

といったように実際琴の音に感動したこともあった。一葉が小説に琴を習う女性を多く描いたのは、こういう時の体験と無関係ではあるまい。琴の音による聴覚効果を「松風のひ<sup>び</sup>き」と比喻しており、これはおそらく『源氏物語』明石巻で光源氏が琴をかき鳴らして

廣陵といふ手あるかぎりすまし給へるに、かの岡のべの家も、松のひ<sup>び</sup>き、浪の音にあひて

という表現を踏襲したものであろう<sup>⑨</sup>。王朝文芸に描かれたイメージで実演奏の琴の音を受け取ったことは意味深い。一葉は『古今著聞集』で音楽の徳の説話を讀んだ時、如上の経験や王朝文芸の情趣に裏付けられて感動を覚えたことがあったと思われる。それで説話の主題を小説として書くに際し、当時では聞く機会の少なかった筆策のかわりに琴にしたのも自然な工夫であったと言えよう。

聴覚による美の鑑賞として、王朝文芸的な「雁が音」、「虫の聲」と同じよう

に「琴の音」による情趣は、審美的対象として一葉にゆかしく意識されていたらしく、

琴は西片町のあたりの垣根ごしに聞たるが、いと良き月に弾く人のかけも見まほしく、物がたりめきて床しかりし（随筆「月の夜」『読売新聞』明治28・9・16）

とある。晩年の筆に見えるこうした美的感覚は、小説『琴の音』の結尾の場面と雅趣がまったく変わらないものではなかろうか。『琴の音』の創作時点において、一葉がペイターの芸術論や西洋の芸術至上主義をどの程度理解していたのかは別問題として、禿木及び『文学界』所載の諸文章の芸術思想に惹かれ、音楽三昧の世界を描こうとする考えがあったとしても、「三更月下の琴聲に和して、こぼれ初めぬる涙」とか、「お静が琴のねは此月此日うき世に一人人生みぬ」といった設定などは、一葉にとっては最も王朝趣味らしく、最も説話的であったと思われる。そこが一葉文学に見られる「不易」の中核であると言える。

### 三

諸道を説く説話は『古今著聞集』に比較的多く、古典文芸においては仏教功德の説話と歌徳説話が中心となっている。長年和歌を習っていた一葉は、さまざまな歌徳説話及び同型説話によく接していたと考えられる。それでこの類の説話における和歌・漢文・管弦の諸道の功德、神・仏の力の高貴性と、被救済者の困境脱却のありがたさなどに気付かなかつたはずはない。歌徳説話の場合は、

和歌の徳をより大ならしめるためには功德をうけるものが貧困卑賤の底に沈むものであればあるだけ、よかつた。さらに貧困卑賤の底に沈むものが歌によって救われたとすることは、歌道を勧める上でも都合がよいということになる

と言われる<sup>⑩</sup>ように、人物には救済前と救済後との対比的設定が必要であろう。

同様に音楽の救済効果を高めるために、一葉としては、救われる人物を初めは生活の底にあえぐ境遇に置かなければならない。『琴の音』の「上」における浮浪児金吾は確かにそれ以上ない不運困窮の身の上であった。

こうした貧困不運の少年が主人公として一葉の小説に登場するのは、この『琴の音』が初めてであった。それまでの一葉は、殆ど「天は美人を作り、美人は恵れず」（『たま櫂』）といった想定で、妙齡佳麗の人の恋の悩みを中心に描いた。『琴の音』における孤児の生活苦に対する着眼及びそれについての描写は、被救性、自救性ともに乏しい人物の方が音楽の救済効果をより高くするのであろうが、意味はそれだけではあるまい。巡査の貧民救済の話に乗った<sup>⑪</sup>一葉は、龍泉寺町周辺に住む貧しい人の子供たち、一分・五厘商売の自家の店前に来る乞食・浮浪児に同情の心を寄せたことが十分考えられる。明治維新以来、東京は一度の人口の流出と、その後の大量流入とを経て、当時の人口構成では、地方から集まって来た人が相当な比重を占めていた。小木新造の『東京時代』によると、明治22年末の統計では、下町の寄留人口が414,703人であったという<sup>⑫</sup>。一葉が見ていた貧乏人の子供の中には、『琴の音』の金吾のような、すみかもない者が少なくなかったであろう。「日記」明治26年5月21日の条に、「かぞへの十三歳」の少年小宮山嘉一郎に同情し、心配するような内容を綴っている。子供・少年問題に目を向け始めた一葉は、一番身近な小宮山嘉一郎をモデルにいろいろな考案を加えて、金吾少年を書き上げたのではないかという説を提起したい。

小宮山嘉一郎は、信州の元蚕種商人小宮山庄司の息子であった。行商先の山梨県で一葉の従姉広瀬ぶんと関係に陥ちた小宮山庄司は、郷里の妻を捨ててぶんと共に上京し、その後、郷里の長男嘉一郎を東京に呼んだ<sup>⑬</sup>。小宮山とぶんは花川戸で古道具の店を営んだが、間もなく窮境に陥り、ぶんは人力車夫となった小宮山庄司を捨てて、行方をくらました。ぶんの行先を探すため、明治26年5月6日以後、小宮山は頻繁に一葉宅を訪ねた。ついに5月21日来訪の際、「悴嘉一郎を迎えとして山梨に送らん」と言い出した。それを聞いた一葉は、



嘉一郎ハ漸くかぞへの十三歳にて十歳何ヶ月の小児なり 是をしも唯一人  
手ばなし三十里の行程ことに知る人もあらぬ処へやりなんとする小宮山の  
心ハすべてこれ悪<sup>悪</sup>の処爲なり（「日記」明治26・5・21、傍点引用者）  
と嘉一郎を不憫に思い、小宮山の父親としての心の酷さを嘆いた。当時甲府へ  
の旅程は八王子からの鉄道が未開通であったため、難所が多く、二日間以上の  
時間が必要であった。一葉一家はいろいろと小宮山を説得したらしく、結局嘉  
一郎は山梨へ遣わされなかったようであるが、一葉の心配はこれで終わらな  
かった。

「塵の中」明治26年7月25日の条に、

此夕へ國子と共に三間丁に病人の安否をとひ歸路花川戸<sup>町字</sup>川待乳山下山谷ほ  
りより日本づゝミをかへる

と記している。7月20日龍泉寺町に移居したばかりの一葉が、開店の準備、仕  
入れ、問屋訪問など多忙を極める中を、間隙を見て花川戸を廻って来たのは、  
そこに住んでいる嘉一郎のことを心配して、その様子を見たかったからであろ  
う。5月23日甲府への出立決意を書簡で一葉に伝えた小宮山庄司は、その後い  
つの日にか旅に出たと推定されるから、その不在の間、一人で生活しなければ  
ならなかった嘉一郎の様子はどうかであらうか。落魄後の小宮山庄司は

着たるものとても其ふる<sup>び</sup>ひたるあはせの外に一枚もあら<sup>ざ</sup>る（「蓬生日記」  
明治26・5・6）

という状態であったから、子供の嘉一郎の姿が『琴の音』の金吾と似ていたこ  
とは想像に難くない。作中の金吾は「人を射るやうな眼」をしているが、この  
点は『にぎりえ』の「目つき凄くて人を射るやうな」結城朝之助と一致する。  
一葉はこの結城朝之助の姿に蚕種商人時代の小宮山庄司のことを素材として使  
ったと考えられる<sup>14</sup>ので、この「人を射るやうな眼」は小宮山父子共有の特徴  
であったかも知れない。

『琴の音』執筆中の11月13日、ぶんの訴訟事件で<sup>15</sup>、ぶんの伯父広瀬七重郎が  
郷里から上京し、一葉宅に一泊した。同年5月13日、広瀬七重郎宛の一葉の書

簡には

昨朝即ち十二日の朝店先に出し置たる賣品の<sup>たらひ</sup>盥何か不正品のかどにて警察に引上げられたるよし元来買出し先さへ明亮に相成らば小宮山に罪の  
かゝるべき筈はなけれど前の通り同人ハ皆無營業上無關係ゆゑ何方より買  
出したる物にやおぶん殿ならでは其処わかり難くさりとて店ハ小宮山の店  
也此買出し先明白ならざる於ては處分を被るにも至るべく（中略）人一人  
罪に落ると落らぬの界と存じ候をこのまゝに打すておくにしのひかぬ  
一書さし出す次第に御坐候おぶんどのの御地に歸り居候ハもとよりよく  
よく御申聞け右たらいのうりぬしと買取直段とを至急御報（傍点引用者）  
との内容が見える。ぶんが家出をした直後の事件であるが、書簡の文面から事  
件の経過と共に「人一人罪に落ると落らぬの界」に際して人を救おうとす  
る一葉の俠気心が読み取れる。偷盜の疑いを被らせ、

人の眼はくもりたるものにて、耳は千里の外までも聞くか、あやまり傳へ  
たる事は再度きえず、渡邊の金吾は誠の盜賊になりぬ  
という『琴の音』の設定は、上記の事件及びそれへの一葉の関心と繋がりがあ  
ったと思われる。

ぶんの訴訟事件で、樋口家はかつて広瀬七重郎から監督の役の相談を受けた<sup>⑩</sup>。  
一葉も麹町裁判所と郷里山梨の七重郎との間の連絡役をつとめた。同事件で上  
京した広瀬七重郎は一葉一家にぶんの話をしたはずである。この時はちょうど  
ぶんの家出事件から半年を経た頃で、帰郷したぶんの様子を聞き、それを母が  
「種々になためさとして正道に歸しめんとすれど説にしたかふべくも見え」<sup>⑪</sup>  
る小宮山庄司のことと比べて、一葉はどんな思いをしたであろうか。日記には  
記してないけれども、当時執筆中の『琴の音』に妻の家出事件を設定し、さら  
に

斯くて半年を経たりし後は、父もむかしの父に非ずなりぬ、見かぎりて出  
にし妻を、あはれ賢こしと世の人のほめものに（傍点引用者）  
と描いたところから見ると、一葉は金吾の両親の話に嘉一郎の父小宮山庄司と

広瀬ぶんとのことを投影させたのは疑いなく、事件後の一葉のぶんへの評価を  
作中に書き込んでいることも明らかである。一葉は逝去までぶんと文通を続け  
ていたから<sup>18</sup>、後に郷里で結婚して安定した生活を送るようになったぶんを幸せ  
だと判断したのであろう。またその一方、ぶんに逃げられて「淺ましき肉戀のは  
て」に狂ったようになった小宮山庄司の印象もあまりにも強く、一葉は『琴の  
音』の金吾の父を始め、『にごりえ』の源七、『十三夜』の録之助のそれぞれに、  
好きな女性に見捨てられると、すぐ途方もない男に変貌するという共通の性格  
を設定した。一葉文芸における、こうした女一人に人生を賭けた男の姿の定型  
化表現は、小宮山庄司という実在人物から受けた印象に由来し、これは『琴の  
音』の創作を機に始まったものであると言ってよい。

『琴の音』の父のモデル小宮山庄司は、その後続けて花川戸で店を経営した  
と推定される<sup>19</sup>。金吾少年の孤児の設定は、モデル嘉一郎の身の上だけに限らず、  
一葉の悲劇意識にも裏付けられていたと思われる。それまでの一葉の小説は、  
初作『闇桜』（『武蔵野』第一編、明治25・3）を除いては、悉く両親に死なれ  
たか、或いは片親を失ったかしたような女性が必ず一人ぐらい登場するもので  
あった。十七歳の年に父に亡くなられ、家が貧困の一途をたどった一葉は、何  
より「頼む大樹のかげ」（『琴の音』）の父の存在を憧れ、心の支えとなる母の  
存在を大切に感じ取り、親の死去は最も不幸なことであると考えたのではない  
か。二年後『たけくらべ』で龍泉寺町界限の子供たちを細緻な筆で描いた一葉  
は、この頃すでに周辺の子供をよく観察していた。一葉の店前を通学の通路と  
する近所の東盛小学校の児童は「天氣の好い日は、提灯、傘張りの内職などを  
するのに忙しく、働くために学校を休み」、「道の悪い、膝頭まで水や泥でよご  
れる雨の日の方が、出席する子供が多い」<sup>20</sup>という有様であったから、それら  
の貧乏人の子供の姿を眺めて、一葉はそのそれぞれの身の上について想像を馳  
せたことがあったであろう。『琴の音』の金吾少年は、こういうモデルのこと  
と、日常の観察と、作家一葉の感情とを重ねた上に創作した人物であったと思  
われる。

#### 四

明治26年10月25日、前月の星野天知の寄稿催促の端書に続き、平田禿木が原稿催促を兼ねて龍泉寺町の一葉宅を訪れた。同日の日記には

午後平田禿木子來訪 來月の文學界にかならず寄書すべきよしを約す 7  
月以來はじめて文海の客にあふ いとうれし

とだけ記してある。ところが禿木の回憶では、この日の訪問は

菊坂の居の対面とは打つて變つて、女史はすっかり打ち解けて語つてくれた。話は西行、芭蕉、近松、西鶴に関することが多かつたやうに覚えてゐるが、次から次へと尽きることなく、興迫つて、女史はほとんど萬丈の氣焔を上げるのであつた<sup>21</sup>

という様子で、二人の話は国文学を中心に展開したことが分かる。その中で一葉は『文学界』に依頼された小説執筆のため、禿木の意見を聞いたかつたこともあつたろう。「いとうれし」と覚えたのはこうした文学的会話のためではなかつたろうか。当時の禿木はペイターの著作『ルネサンス』に心を惹かれ、周囲の人に紹介していた頃であり<sup>22</sup>一葉との会話でも、ペイターの芸術観について話したとしても不自然ではない。「あらゆる芸術は音楽の状態を憧れる」<sup>23</sup>というペイターの名句に含まれた思想から、何かの形で音楽のことにも及んだこともあつたろう。『琴の音』における音楽の力という主題の設定には、このような禿木によるペイターの音楽至上の芸術観の影響がなかつたとは言えない。

しかし、禿木の回憶に書かれたように、一葉本人は終始国文学の範囲から一歩も出なかつた。実際、文芸の理念や小説の創作について、一葉が禿木から何かを得たかという点、この日の話の内容よりも、明治26年3月21日禿木が菊坂の一葉宅を初訪問した時の話をもっと印象が深かつたと言えるに違いない。

さしも二人三人女文學者と呼ぶ人あれと大方ハ西洋の口真似なるそ口をしき 我文學界は女流文學者の日本思想をもて長せしめんとするを雨夜の星といと稀なりかし はじめより文學にと名のりあけて志さず人のまこと

文學に花さかするぞすくなき 思ふにもあまりしのふにもたえずして、文に成り文章なり、しかしてこそ世をも人をも動かすなれ、明治女學校などに文學思想をやしなひ初めしと見ゆれと筆とりて物いふ人などの出来んハ近々の事には非ざるべし（傍点引用者）

と、これほど綿綿と禿木の話長く当日の日記に記したのは、内容が気に入ったからであったと言わなければならず、一葉はこれを文学界の女流作家への期待として受け取ったかも知れない。『文学界』からの原稿依頼を受けた一葉がすぐ『古今著聞集』を繙いたのも、上記の内容がまだ脳裏に響いていたからであったろう。この時はまた禿木の来訪を迎え、前掲のような文芸談を交わしたが、結果として、『琴の音』の構成に現われたように、一葉はペイターの芸術精神から間接に影響を受けたとしても、ただ「西洋の口真似」をすることなく、むしろ、日本古典文芸における音楽思想の展開と、目前の社会における現実の問題への直視とをもって、西洋近代の芸術至上主義と融合させようと努めたものであろう。

一葉と『文学界』との繋がり、明治25年末、田辺花園を介して『文学界』同人からその創刊号に掲載すべき小説の執筆依頼を受けたことによって始められた。この依頼に対して、母と妹とが

斯く雑誌社などより頼まるる様に成しはもはや一事業の基かたまりしにおなし（「よもきふにつ記」明治25・12・24）

と喜んだのに反し、一葉自身は「此ごろの早稲田文學に文學と糊口といふ欄ありしを思ひ出れば、面てあからむ業也」と内心忸怩たる思いを抱いた。一葉は『早稲田文学』二十四号（明治25・9・30）「時文評論」欄の「文学と糊口と」（署名T・O<sup>24</sup>）という文章を読んだであろう。文中には

眷族を養ふべき料をやさらば（中略）俗受を主とせざるを得ず日夜営々として唯俗受のよからむことをのみ力めんか真文学に遠ざかること日に益々甚しかるべし」

とあり、芸術至上の立場から「文を売って口を糊すること」を否定している。

かつて桃水の

「弟妹父母に衣食させんが故也」との小説執筆の理由に「誠にさこそ」  
（「若葉かけ」明治24・4・15）

と同感した一葉に、この頃文芸思想の変化が現れた。女性解放、浪漫的情緒を尊ぶ『女学雑誌』に集う青年たちの創刊する『文学界』からの原稿依頼であったので、これをきっかけに一葉は文学について真剣に考え始めたのであったかも知れない。

一葉の日記を辿ってみると、「我れは營利の爲に筆をとるか さらは何か故にかくまてにおもひをこらす」「家ハ貧苦せまりにせまりて」「こゝろのほかに文をうることのなげかはしさ」（「よもぎふにつ記」明治26・2・6）と、文学と糊口との間に心を悩ませ、また桃水の小説『胡砂吹く風』（金桜堂、「上」明治25・12、「下」同26・1）を読んで

桃水うしもとより文章粗にして華麗と幽棲とをかき給へり 又ミつからも文に勉むる所なくひたすら趣向意匠をのミ尊び給ふと見えたり（「よもぎふ日記」明治26・2・23）

と、趣向をのみ本位とするその作風への批判を表わさずにはいられなかった。さらに禿木の初来訪を迎え、前記のような語らいを丁寧<sup>丁寧</sup>に記録し、翌日また禿木より『暁月夜』（『都之花』明治26・2）評並びに「至道のために一滴の涙をそゝぐを得たし」との文学精神で一葉に勧めた文面の書簡を受け取った。

月花にそゝく涙のあまりは玉露と成りて文章ににはほせ、しほりと成りて悟りの道にしるべせんはいとよしかし、涙に迷ひて涙の人に成なんいと淺ましや、こは人の上のミならず、我が上にもようせずは來たりぬべき事なり（「よもぎふ日記」明治26・3・22）

と、文芸の道に専身するには涙だけでは危うく、感情と客観との両方を的確に把握しようとする冷静な思考を日記に示している。

これが一葉における文学的精神の変化であったろう。『琴の音』の創作とほぼ同時期にまた小説の執筆に関する思案を「流水園雜記一」（明治26・11）に

綴っている。

よむことの難きにあらずよくよむことの難きなりと何がしの脚の仰せられしは敷寫の道のミならず はかなき戯言といへども世道人情をもとゝする小説の作こそ又至難のわざ成けれ 小説は猶宗教の如し 心底より出たるものにあらざればうつしかたしとさる人いひけるはことはなれど其宗教にすら猶かたよりたる処あらざらむやは すべて我愛憎好悪の念を捨て、かくれたるを顯しうづもれたるを照らし唯大空の月日のくまなきがごとひたすら公平ならむことを願ひて (以下略)

このように文芸表現の精神性、公平性を求め、文中の「唯大空月日のくまなきがこと」の考えは、直接『琴の音』の表現に投影しているものである。例えば、冒頭の「空に月日のかはる光りなく、春さく花の、どけきは浮世萬人おなじかるべき」との一段や、「下」の

紅葉の上に照る月の、(中略) 天下一面くもりなき影の、照らすらん大厦も高樓も、破屋の板間の犬の臥床も、さては埋もれ水人に捨てられて、蘆のかれ葉に霜のみ冴ゆる古宅の池も、笥のおとなひ心細き山した庵も、田のもの案山子も小溝の流れも、須磨も明石も松島も、ひとつ光りのうちに包みて、清きは清きにしたがひ、濁れるは濁れるまにまに、八面玲瓏一點無私のおもかげに添ひて、澄のぼる琴のね何處までゆくらん、うつくしく面白く、清く尊く、さながら天上の楽にも似たりけり

という長文で月の光の公平無私性を描き、その無私性と対照的に琴の音の聖潔性を描出しているのではないか。このような月の公平無私性のシンボルは後の小説『十三夜』(『文芸倶楽部』明治28・12)の結末にも書かれている。

一葉は小説の方法においていろいろと試行した。戯作調の模倣、漢文学からの引用、古典文芸の摂取、和歌の表現など、こういう経験と結果を重ねた上に、積極的に新しい文芸精神を受け入れることによって、『琴の音』を創作し、作家としての転換点を形成した。『琴の音』の写実と浪漫精神との組み立ての構造は、一葉の審美眼及び社会観を反映した作品の世界を作り、貧乏人の子供へ

の注目、貧富の差による人間の拗ねた心や女に見捨てられた男の放埒の性格、徳による弱者の困境からの脱却などの設定及び描写は、おのずと後の作品『やみ夜』（『文学界』明治27・7、9、11）、『大つごもり』、『たけくらべ』、『にごりえ』、『十三夜』などへの準備をすることになった。この意味で、『琴の音』は一葉の名作の基盤を築いた重要な作品であったと言える。

## 注

- ① 岡保生『薄幸の才媛樋口一葉』（新典社、昭和57）125頁。
- ② 松坂俊夫『増補改訂 樋口一葉研究』（教育出版センター、昭和58）39頁。
- ③ 和田芳恵『樋口一葉伝』（新潮社、昭和35）174頁。
- ④ 笹淵友一『「文学界」とその時代』（明治書院、昭和38）1213-1214頁。
- ⑤ 塩田良平『増補改訂 樋口一葉研究』（中央公論社、昭和43）487頁。
- ⑥ 『全集樋口一葉』小説編一（小学館、昭和54）木村真佐幸脚注。
- ⑦ 『日本古典文学大系84 古今著聞集』（岩波書店、昭和41）の小標題による。『日本文学全書21 古今著聞集』（博文館、明治24）には、各説話の題はない。
- ⑧ 樋口悦編『一葉に與へた手紙』（今日の問題社、昭和18）八十四。
- ⑨ 東京大学三谷洋一教授の御示教によると、「琴の音に峰の松風通ふらしいづれのおより調べそめけん」（『拾遺和歌集』451、斎宮女御）という歌以来、琴の音イコール松風の受け入れ方が定型化したそうである。
- ⑩ 森山茂「歌徳説話序説」（『尾道短期大学紀要』昭和50・1）
- ⑪ 「塵中日記」（今是集乙種）明治26年10月25日の記事に「此夜田辺查官来訪貧民救済之事につきはなしあり」とある。
- ⑫ 小木新造『東京時代』（日本放送出版協会、昭和55）
- ⑬ 萩原留則『樋口一葉と甲州』（甲陽書房、平成元）参照。
- ⑭ 拙稿「樋口一葉『にごりえ』と小宮山庄司」（『文芸研究』141集、平成8・1）
- ⑮ 「蓬生日記」明治24年9月24日の記事参照。
- ⑯ 同前27日の記事に「午後より広瀬七重郎参る ぶん子公判前裁判執行てふことに成きとて（中略）監視のことにつき種々相談あり」とある。また同9月30日の記事に「広瀬七重郎来る ぶん子のことに付種々依頼せらる」とある。
- ⑰ 「につ記」明治26年5月19日の記事参照。
- ⑱ 「樋口一葉こぼれ話」（『朝日新聞（山梨版）』昭和38・3・19）参照。
- ⑲ 同注⑭拙稿参照。
- ⑳ 上島金太郎『樋口一葉とその周辺』（笠間書院、昭和44）98頁。
- ㉑ 平田禿木『文学界前後』（四方木書店、昭和8）126頁。
- ㉒ 清田文武「上田敏と万物流転の思想——ベイター、マーテルリンク、ベルグソンの影響——」（『文芸研究』121集、平成元・5）参照。
- ㉓ ベイター『ルネサンス』『ジョルジョーネ派』の章（別宮貞徳訳、富山房、1987、傍点訳本原文のまま）。



②④『樋口一葉全集』第三卷（上）（筑摩書房、昭和51）の補注によると、作者は奥泰資であるという。

### 討議要旨

ミコワイ・メラノヴィッチ氏が、発表者が最初のテーマにしていた『琴の音』の「世界」について説明を求められた。発表者は、謡曲「鳴門」や「蟻通」をあげ、日本文学の歌徳説話にふれ、一葉が、このような和歌の徳や音楽の徳の話に親しんでいたことが『琴の音』に影響を与えたであろう、そういったことを一葉の「世界」として考えている、と答えられた。